十刃になりたかったお姉ちゃん

バラフバフ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様っぽい奴に十刃になりたいと願ったら、主人公の姉になった奴の話。

それだけ。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 28
第3話 …… 59
第4話 …… 78

第1話

「水色！悪いっ！今起きたとこなんだ！上がって待っといてくれるか？」

その日の朝、黒崎一護は珍しく遅い時間に目を覚ました。

少女の姿をした死神、朽木ルキアと出会い、彼が死神代行として虚、魂を食らう化け物と戦うこととなってから既に一月が経とうとしていた。学生と死神の二重生活によって彼が疲弊していたのは確かだが、それでも寝坊することなど今日まで無かった。というのも

「あーーーーーも――――何だって今日に限って親父の奴は起こしに来ねーーんだ!?」

普段であれば彼の父親である黒崎一心がウザったらしいハイテンションをひっさげ、息子を叩き起こしに来るのだが、今日に限ってそれがなかったのである。

「いつもなら呼んでもねーのにガ――――ッと……」

そのことを疑問に思いつつ、彼は時計に表示された日付を見つめ、その訳を悟る。

6月16日

「……そうか……近いんだな…」

６年前の明日、６月１７日。
彼の母親と、〝姉〟の命日である。

なんか気づいたらくたばってて、目の前に神的な爺がいた。
何かごちゃごちゃとまくし立ててきたんでめんどくせーから思いっきり聞き流してたけど、俺様を好きな世界に転生させてやるとかゲロやべえこと抜かしてくれちゃったから週刊少年ジャンプを代表するポエム作品、『ＢＬＥＡＣＨ』の世界に転生させてくれ、つったら快くオッケーしてくれた。
そんで他にもいろいろ便宜図ってくれちゃうって言うもんだから、俺様の激推し集団、十刃の一人に転生させてくんね？ってダメ元頼んでみたら、こりゃまた快諾。
んでそっから調子乗って、出来るだけ色んなキャラと関わりたいと言ったり、帰刃は

こーゆうのがいいと妄想語ったり、思いつく限りの望みをとにかくオーダーした。
……しっかしそん時ＴｏＬｏｖｅるの美柑ちゃんの外見になりたいっつった時の爺の表情、ありゃ何だ。
いいじゃねえか成人男性が幼女になりたがっても。
そんでいよいよ俺様の新たな生がスタートって段になって爺が爆弾発言ぶち込んできやがった。
「あくまで要望は参考にするだけで全部叶う訳じゃないんで、あしからず」じゃねえよ、クソ老害が！
最初に言った？知らねーよ！聞いてねえんだよ、こっちはよォ!!
俺様のチート転生に瑕疵があってみろ、次会ったときにテメエの頭掻っ捌いて、針で脳髄かき回してやっからなあ!!

おぎゃあと生まれた俺様だ。
そんで初めて聞いた言葉は
「おめでとうございます、女の子です」
だとよ。

はい、不具合一つ目――！
十刃つったろうがァァァァァ!!!!!!!!
あの腐りかけの……!!!!……

「違うから織姫！それ違うから!!」
「あ……あんたまた居残りさせられたいのッ!?」
「???」
朝、空座第一高等学校1―3の教室にて、井上織姫は友人の小川みちると有沢竜貴から自身の美術の課題の出来に関してツッコミを受けていた。
と、そこへ
「あ、おはよう！黒崎くん!!」
彼女の想い人であるクラスメイトの黒崎一護が現れた。彼はすぐに井上へと向き直り
「おう！オハヨー！井上！」

と、いつになくにこやかな表情とトーンで返した。
「な……何あれ…どうしたの!?黒崎くん今日ヤケに機嫌いいじゃない？ねえ、織姫!?」
普段とかけ離れた様子に面食らう小川。しかし井上は
「なんで……黒崎くんあんなピリピリしてるんだろ…」
「…え?」
彼の朗らかな態度に隠した内面を敏感に感じ取っていた。
「みちる、今日って何日だっけ?」
「え?6月16日…だけど?」
「そっか」
困惑する小川を他所に今度は有沢が突然日付を尋ねると、直後どこか遠い目でこう続けた。
「織姫、やっぱアンタすごいわ。あたしはあれに気付くのに3年かかったもん」
「たつきちゃん…?」
「もし一護に急ぎの用があるなら今日のうちに済ませときな
…あいつ、明日休みだから」

そんな彼らの様子を朽木ルキアと…石田雨竜が見つめていた。

転生してから早数年、霊感に目覚めたり弟できたり小学校に入学したり色々あったよ。

俺様、今世では黒崎美柑という名前です。

そう俺様なんと主人公黒崎一護君のお姉ちゃんになっちゃいましたよ、ハアー。

色々不満はあったけどよ、そう、オーダーしたもんが外見以外一個も反映されてねえとかさ、それでも前世の知識もあったからそれなりにエンジョイできてますよ。

俺様ってば、歳のわりにしっかりしてるし、下の子の面倒もよくみるいいお姉ちゃんだし、外見もいいし、勉強もできるし、さらに今世じゃ運動神経もいいし、まあ周りと話題合わせんのには苦労したけど、そこは慣れたし、まあ、もう周囲からの評価はバリクソ高いわけですよ、ハッハー。前世知識チート最高！あ、霊感あるけど言いふらしちゃいませんよ、不思議ちゃんにはなりたくないんで。

さらに両親は……ヒゲはちょっとウザいけど……どっちも優しいし、下の子も可愛いし、言うことなし。

今日は可愛い弟と一緒に近所の駄菓子屋にアイス買いに行きましたぜ。いやあ、ショタ一護意外と可愛いですよ、素直で。
その我が愛しの弟が帰り道にすっ転んでねえ、これが泣くの我慢しようと若干の強がり見せたのよ、結局泣いたけど。
俺様にカッコつけたかったのかねえ、かーわいいー。
しっかし家帰ってから、もう泣かない宣言貰っちゃったのはちょっと寂しいかな。
だからまだバリバリ甘えてきていいんだぜ？的なこと言ってしまった。
まだ俺様は頼られていたいのだ、弟よ。

空座第一高等学校1年の浅野啓吾は帰宅してすぐに
「……げ」
「あ？…げ、って何？何か文句でもあんの？」
「…イヤ、何もないっス」
先に帰宅していた姉のみづ穂に出くわした。

「何で今日早ェーんだよ……」
「聞こえてるからな、オイ……今日は生徒会の仕事が早く終わったのよ」
「あ、そっスか…」
　別に仲が悪いという訳でもないのだが、お互いを鬱陶しく感じる年頃故の微妙な空気が流れる。
　やがて思い出したようにみづ穂が軽い調子で啓吾に問いかける。
「……そーいえば、一護くんどうだった? 何か変わった様子とか……」
「え? 別にねーけど……ああ、ちょっと機嫌よかったかもな」
「……そ」
　それだけ聞くとみづ穂は自室へと消えた。
「……何なんだ、アイツ」
　疑問に思った啓吾が、ふとカレンダーに目を向ける。
「……ああ、そっか、あの人の」
　姉も友人もきっと6年前の明日亡くなった、彼女を悼んでいるのだろう。
　そして彼にとって彼女は彼の初恋を奪った相手でもある。

俺様、小学校上がってから実は塾に通わされてんだよな。
最初は俺様、中身は成人男性だから身にならねえし、絶対御免蒙ると思っていたんだけど、通い出すと意外と面白ぇ。
勉強の内容ってか教え方がまあ興味深ぇ。今迄全く気にも留めなかったんだけどよ、教えるテクニックてのはやっぱあるんだな。
それはそうと、その塾に何か妙に敵愾心?き出しのクソガキがいやがる。
コイツも中々優等生なんだが、俺様と比べるとどうにもな。
ま、せいぜい頑張れや。
と、思っていたんだけど、最近このクソガキ何やら伸び悩んでいそう。
いや、別にいいんだけど、何か成績張り出される度に俺様を射殺すような視線で見るのはやめて欲しい。
で、ある日、塾に早めに来て暇を持て余してたら、例のクソガキ発見。
何か塾の課題で詰まってるみたいだったから、暇だし強引に話しかけて解き方教えてやった。

そっからそれがきっかけでそいつがよく俺様に分からないとこを訊きに来るになった。

俺様としては教えるのも嫌いじゃねえからまんざらでもなかったし、そのうち勉強のこと以外も話すようになって、わりと仲良くなった。だけど、よく話すようになってから向こうから言われた「話してみたら意外と馬鹿」って言葉、ありゃ何だ？俺様のどこが馬鹿だというのだ。言い返したらまた馬鹿だと言われた、解せぬ。

そして驚愕の事実判明。

このクソガキ、一護の友人（になる予定）の浅野啓吾のお姉さんだった。

コイツの家に遊び行ったときにたまたま出くわして、なんか見覚えあるなと思ったら、案の定でしたわ。

しかし、やっぱ家によって姉弟事情って違うのな。

こっちは完全に姉の尻に敷かれてて哀れだったから優しくしてやった。

そしたら結構懐いてくれてさ、可愛いもんだよ。

しかし、モブだと思ってたら、たまたまネームドキャラだったとか……こんな偶然もあるんだなあ。

既に日は落ち、家々に明かりが灯り始めた頃、黒崎家からは賑やかな声が響く。
明日家族総出で墓参りへと向かう、その打ち合わせをしているのだろう。
そんな様子を窓を通し、少し遠くから眺める小さな人影が一つ。
年齢は十代前半ぐらいだろうか、パイナップルを思わせる髪型や白いケープのような衣服など、外見上目を引く点は多くあるが、何より奇妙なのは頭部の両側に張り付いた髪飾りのような仮面片である。
ふと、その人物が背後へと声をかける。
「……やあ、久しぶりだね……雨竜くん」
虚を屠る狩人、滅却師（クインシー）の生き残りである石田雨竜がその人物の背後で弓を構えていた。
「…ええ、お久しぶりです、黒崎さん」
「物騒だなあ…そんなビクつかなくてもいいのに」
張り詰めた空気と裏腹にその人物は雨竜へとにこやかに応じる。しかし、雨竜は緊張を解くことはなく目の前の相手の一挙手一投足に集中している。

「……一応訊いておきますが、貴女はどちらですか？」
「その弓を見るに、もう分かってるんでしょ？」
その言葉は、目の前の存在を敵だと雨竜に改めて確実に認識させるものだった。
しかし、矢が放たれることはなかった。
依然として矢の矛先は例の人物を向いている、が、雨竜の呼吸は荒く、腕は震え、照準がうまく定まっていない。
その姿を視界に収めたその人は少し悲しそうに微笑むと、努めて平静さを取り戻そうとしている雨竜の手に自身の手を置き、囁く。
「虚を前に情を持ってはダメだよ、でないと……死ぬよ？」
言葉と共に彼女は突如として姿を消した。
「っ！」
すぐさま霊圧を探るも、どこにも見つからない。どうやら既に索敵可能範囲から抜け出したようだ。
「……クソッ」
緊張が解け、膝から崩れ落ちる。
虚に弓を引けなかったこと、それを雨竜は深く恥じた。

滅却師として許されない行為であったこと、確かにそれも一つの要因ではあったが、それよりも、逃がしたことを深く安堵している自身を、恥じたのであった。

ある日河川敷辺りを歩いてたら、何かメガネのショタっ子が泣いてたから迷子かと思って話しかけた。

何かお父さんと喧嘩したとかで帰りたくないとか言うから、じゃあ俺様が一緒に謝りについてってやるぜ！って強引に家まで案内させてついてった。

で、そっからが驚きだったんだけど、石田って表札あったからマジかと思ったら、やっぱショタっ子石田雨竜くんでした。

俺様の顔見てお父さんの竜弦さん驚いてたけど、なんか普通に茶出して歓迎してくれた。

向こうがなんでもねえ感じでお母さんの近況とか訊いてきたからこっちも特に意識することなく何も知らない体で答えた。

俺様の顔知ってるってことは、多分交流あるんだろうな。いやヒゲあたりが一方的に

グイグイ行ってんのかもな。
一応その日は親子で和解したみたいで、それ見届けてから帰った。
その後も何でか雨竜くん、ちょくちょく見かけるようになって会えば話す程度には仲良くなった。
そのうち、俺様に霊感があることがバレて、そしたら雨竜くんが虚についてレクチャーしてくれた。
つってもこーいう化け物を見たら逃げること、ぐらいな内容だったけど、俺様のためを思って一生懸命話してくれてマジ可愛いかった。
俺様子ども好きかもなー……教えるのも好きだし…教師とか目指そっかな……。
そーいや、そろそろ一護も9歳ぐらいになるし、6月も近い。
俺様いることで原作のストーリーラインからどれだけ外れるかはわかんねえけど、お母さんが死ぬ可能性は依然としてあるし、取り敢えず一護には知らない子を見かけても一人で助けに行こうとせずに、大人を頼るよう言い含めておいた。
でもなあ、不安だなあ。
正直、転生した直後は不満垂れ垂れだったけど、今は本当に良縁にばっか恵まれて楽しい日々送ってる。
失いたくねえなあ……当日は早めに家帰ってから周辺見てまわろう。

何が出来るわけでも無いけど、二人が安全に帰れるよう見張るぐらいはしときたい。

「ハァ…ハァ…ッ…ハァ、かひゅ、ゲホッゲホ！」
「一護！おい、一護！くっ、一体どうしたのだ、突然…」
改造魂魄を巡る騒動に奔走したその日。
無事、改造魂魄を捉えることに成功した後、ふとルキアが少し遠くにあるビルに一瞬だが霊圧を感知した。すぐにそちらに目を向けたが、そこには何もいなかった。
気のせいかと思いながらふと一護を見やると、目を見開き、先ほど自身が霊圧を感知した付近を見つめていた。
どうしたのかと疑問に思ったその時、彼は突然過呼吸を起こし、膝から崩れ落ちた。
「……ご……さい……ゴホッ」
「何だ？何を見たのだ？」
苦しそうに荒い呼吸を繰り返しながら、一護は何かを呟いている。
ルキアはそれを見た何かについて伝えようとしているのだと考え、聞きとろうと耳を

澄ます。
　途切れ途切れで紡がれる言葉、しかし、ルキアは確かに聞いた。
「ごめん……なさい……姉ちゃん…ごめん……ごめんなさい……」
「……一護…」
　ひたすらに紡がれる言葉にどうすることも出来ず、ルキアはただ黙って見守ることしかできなかった。

（いったいどこに行ったの……）
　黒崎真咲は町中を走り回っていた。
　娘である美柑は自慢の娘だ。ちょっぴり抜けているところもあるが、成績は優秀で面倒見も良く、下の子からも懐かれている。そんなしっかり者の我が子が、何故か日が暮れて夜になっても一向に帰ってこないのだ。
　塾に連絡をしたが今日は体調が悪いので休むと本人から連絡があり、来ていないとの

ことだった。
既に警察には通報したが、何もせずにじっと待つことなどできず、また、当然夫も同じ気持ちだったようで、二人で探し、子どもたちは先に寝かせようと考えたのだが、長男の一護が自分も探すと言って聞かなかったため、下の二人は寝かせ、自身と息子の二人、夫一人の二手に分かれ、夜の町を駆けていた。
あの子は親の贔屓目を抜きにしても可愛い外見をしている。それは自慢であったが、今はそのことがさらに不安を掻き立て、よからぬ想像がどんどん際限なく浮かぶ。
探すうち河原に至る。
川は連日続いた雨で氾濫していた。
歳のわりに賢い娘がよもやとも思ったが、足を滑らせて落ちたという可能性もある。
ふと、後ろにいた息子が立ち止まる。
「あ、姉ちゃん！母ちゃん！姉ちゃんいた！姉ちゃんいたよ！」
その声に振り向き、その場を目指すと、確かにそこには娘の姿があった。
しかし、その背後にいた存在、それが黒崎真咲の足を止めた。
そこにいたのは虚、そしてその形態から考えるに、あの娘の形をしたものは疑似餌か。
そこまで思考が至れば分かる……分かってしまう。
黒崎真咲は優秀な滅却師だ。

虚との交戦経験もそれなりにある。
故に理解できてしまう。あの虚がどういったタイプで、そして己が娘がどのような結末をたどったのか。
そして、その絶望的な事実が一瞬彼女の動きを止めたのだ。
故に、それは起きた。
「姉ちゃん！どこ行ってたの？そこ、危ないよ！」
己が息子が娘の姿をしたものへと足早に向かう。

「っ！一護っ！戻りなさい！」

息子の声と共に我に返り、彼女は叫ぶ。
しかし、時すでに遅く、息子は虚のほど近くにいる。
「え？」
息子が振り向くも、もう既に虚はその鋭い爪を振りかぶっている。
急ぎ飛廉脚による高速移動で息子の傍まで移動し、そして弓の形状をとる滅却師の武器、霊子兵装を構築せんとしたそのとき、
「っ？な、なによ、これ……」

構築されかけていた霊子兵装、それが再び霊子へと還り、崩壊していく。
それどころか、彼女は自身の内から滅却師としての力が抜けていくような感覚を覚えた。
その日は6月17日。
滅却師の王、ユーハバッハが自身が不浄と断じた滅却師からその力を奪い取った日だった。
武器を構築できない、そんな絶望的な状況下でも彼女は己がすべきことをしっかり認識していた。
すぐさま息子を庇うも、その結果虚の攻撃を直に受けてしまった。
しかし、それで終わるはずはない。
彼女はかばいながらも発動させていた、滅却師が己が術を込めた銀筒という武器を
「ぐっあああああああああ!!!」
件の虚は悲鳴を上げのたうち回る。
「許さん! 許さんぞぉぉぉぉぉ!!!小娘ごときがこの儂に、」
激昂し、今すぐにでも目の前の不遜な羽虫を始末したいと虚は強く思う。
しかし、怒りのまま追撃を加えることは能わなかった。
黒崎真咲は本当に優秀な滅却師であった。

彼女は息子を庇いながら、既に銀筒を用意していた。
しかし、それはこの虚を殺しきるほどのものではなく、そして数も少なかった。
あくまで護身用であり、また街中での戦闘を想定し、現世に影響を与えるほどの強力な術を込めることはしていなかったためである。
よってここですべきはこの虚の撃退ではなく、息子を守ることである。
彼女の狙い通り、虚は銀筒をちらつかせれば怯み、やがて姿を消した。

「……くっ、……ハアハア……」

しばらくして虚が完全に立ち去ったことが確認でき、彼女は一気に気が抜け、強烈な倦怠感に襲われる。
息子はどうやら虚の強力な霊圧にあてられ、気を失っているようだ。

「……ごめん……ごめんね、一護……夏梨、遊子…あなた……美柑」

自分はもう死ぬ。それは惜しくない。こうして息子を守り切ることが出来たから。

しかし、この子たちを残していくことが、そして、娘を、美柑を救うことが出来なかった、そのことが堪らなく、

惜しい

グランドフィッシャーという虚がいた。
疑似餌を用い、得物を誘う、狡知に長けた虚。
しかし、それだけだった……それだけのはずだった。

ある時からその虚は変わった。

共食いをするようになったのだ。

それも毎日休むことなく、同族を探して駆けずり回り、ひたすら獲物を求め、それも間断なくひたすらであったため、その量も尋常ではなかった。

その疑似餌は人ではなく虚を誘うものに、身を隠す術も虚へと向けたものに、それぞれより発展した。

やがて、その虚は大虚と呼ばれる存在となった。

しかし、共食いはやめなかった。

同族相手に鍛えられた気配遮断技能により、その虚は一度も他の虚から手傷を負わされることはなかった。

下級から中級へ、中級から最上級へ、その成長速度は異常の一言に尽きた。

やがて、最上級へと至ったとき、その虚は己が疑似餌を切り離した。

いや、いつからだろうか、それはもはや疑似餌ではなかった。

その瞳には確かな意思が感じられ、また纏う霊圧は本体とはくらべものにならなかった。

そこにいたのは疑似餌ではなく、グランドフィッシャーという虚に寄生し、最上級大虚へと至った、かつては黒崎美柑と呼ばれていた魂が変質を遂げた、一匹の破面であった。

見つかったと思ったときにはもう遅かった。

俺様の眼前には既にグランドフィッシャーの口腔が広がっており、逃げる術はなかった。

俺様の魂はバラバラに引き裂かれ、無残に食い散らされた。

しかし、そこで終わることはなかった。
何故か俺様の意識だけはグランドフィッシャーの中にあり続けた。
そこから俺はずっとグランドフィッシャーの両目を通して、繰り返される戮殺を見せつけられた。
母から始まり、様々な人間がグランドフィッシャーの疑似餌に騙され食い荒らされるのをずっと見ていた。
俺様を食ったことが影響しているのか、俺様の友人も何人もグランドフィッシャーの犠牲になった。
それも俺はただずっと見ていた。
必死に逃げ回った末に捩がれた足を、肉親を庇って吹き飛んだ腕を、末期の言葉を言い切る前に砕かれた顎を、小さい命を抱えていながら無情に抉られた腹を、ただ見ていた……はずだった。
しかし、やがて何十回目の鮮血で腕を濡らした時、ふと気づいた。
身体を動かしているのは、俺だった。
いつからなのかは分からない。もしかしたら食われてからずっとそうだったのかもしれない。

途端に恐ろしくなった。

それから、人を食えなくなった。

何もしていないと恐ろしくて堪らなくなる。

だから同族を狩り続けた。

殺戮衝動に身を任せていれば何も考えないでいられる。

だからずっと

ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっ
とずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと
ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっ
とずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと
ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっ
とずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと
ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっ
とずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと
ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっ
とずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと
ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっ
とずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと
ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっ
とずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと
ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっ
とずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと
ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっ

とずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと
……………………………

目が覚めた時、何故か俺は死んだ時と同じ姿で砂漠に立っていた。
傍らにはグランドフィッシャーの肉体があった。

呆然としていると、俺の頭上から男の声が響いた。
「やあ、お初にお目にかかるグランドフィッシャー……それとも、こう呼ぶべきかな、黒崎美柑」
目を向けた先には三人の死神。
ああ、そうか
「ご要望通りってか……ハハ」

第2話

だから　思ったんだ
俺は死ぬまであいつらを守ってやらなきゃいけないって
そう　思ったんだ

6月17日、毎年この日には黒崎家総出で墓参りに向かう。
夏へと向かうこの季節、その日は随分と暑かった。

そして同じだけ黒崎一心も暑苦しくウザかった。
逆立ちしながら坂を上ったかと思うと娘の足元へとスライディングをかまし、スカートの下からパンツを覗いたかと思えば、もう一人の娘に蹴りを食らい、坂を転がり落ちるという想像するだに鬱陶しいことこの上ない乱痴気っぷりを見せていた。
その様子に呆れながら黒崎一護はふと6年前のあの日へと思いを巡らす。
雨に濡れたあの日の記憶、それと共に誰かとした古い会話が何故か思い出された
『そっかー、でも……
「あれ、先客がいる」
妹の言葉にふと我に返る。
「ホントだ。あの人もお墓参りかな?」
見ると少し先に小柄な人影が見えた。……何故か既視感を覚えた。
「でしょ。あ、こっち向いた」
(なんでいるんすかーーーー!!!)
そこには矢鱈と眩しい笑顔でこちらに大きく手を振る、彼と因縁浅からぬ死神の少女(?)……朽木ルキアの姿があった。

「なんでついて来てんだよっ!?」
　あの後、黒崎一護は家族に断りを入れたのち、雑木林の中、朽木ルキアと二人きり（彼女のカバンにコンもいるが）で向かい合っていた。
　勝手についてきた彼女に詰め寄るも、反省するどころか不機嫌そうな態度を見せることに面食らってしまう。
「……お前、何怒ってんだ？」
「別に、怒ってなどおらぬ……なあ、一護、貴様何を恐れている？」
「……は？」
　思いがけない言葉に一瞬思考が止まる。
「初めは母親と姉の命日が近づいていることで気が立っているのだと思っていた。しかし、それだけではないだろう？コンとの一件の後のことも一切語ってはくれぬが、思えばあの時からか」
「……何が言いてえんだよ」
「……殺された、と言ったな、貴様の母親…」
「…言ってね―よ」
「…誰に殺された？」
「言ってねっての。忘れろよ」

「貴様は物心ついた頃から霊が見えたと言ったな。……ならば、だ」
「……」
「貴様の母親を殺したのは……虚ではないのか？」
　チッ
「そして……貴様が恐れているのは、その虚の姿を確認したからではないか？」
　ああ
「物心ついた頃から霊が見えるほどの霊的濃度だ。貴様が虚に目をつけられていたとしても何ら不思議ではない」
　まったく
「あの時、かすかにだが遠方で霊力を感じた。貴様はそれを確認したからこそ……」
「やって…らんねーーーーー!!!!!」
「っ?!」
「冗談じゃねーぞ」
　まったく本当に冗談じゃない
「てめ―にかかったらナンでもカンでも虚の仕業になっちまうのな」
　ああ、それがどれだけ、甘い誘惑であるか
「もとからジョーダンじゃねーのにだ、そんな理由にされちゃ、更にジョーダンじゃねー

ことこの上ねー」
　ああ、この理由だけは譲れない。許されない
「…虚とかじゃねーよ！」
　彼は朽木ルキアに向き直り、言葉を続ける
「予想が外れてザンネンでした……」
　否、続けようとした。その先を続けることは出来なかった。何故なら彼の視線の先には
「ウ…ウソだろ…」
　彼の罪の象徴の姿があったから
「……姉貴……」

……

　思い出すのはずっと昔の話
「あーんた、いっつも泣いてんね」
　遠い遠い、いつかの記憶
「ぐすっ……う、うるさいっ！姉ちゃんだってこの前映画観て泣いてたくせにっ！」

「……うーん、それを持ち出されると弱いなー。けど、さすがに転んでちょっと擦りむいたくらいじゃ泣かないかなー」

近所に姉貴と二人でアイスを買いに行って、その帰りに俺がバランスを崩してすっころんだんだ。

「ほらほら泣かないの。……歩ける？」

「……ずぴっ…大丈夫……」

「そう……でも、辛いなら言いなよ？お姉ちゃんがおぶってくから」

「……うん、分かった」

ホントは痛かったけど、強がって歩いたんだっけ。

家に帰ってから、姉貴が消毒液をかけて絆創膏を張ってくれた。

その消毒液がまた染みて痛かったけど、泣くとまた揶揄われるから、グッと我慢した。

「……うん、これで良し」

「ぐすっ」

……いや、ちょっと泣きかけてはいた。

「ふふ、痛かったでしょー。よく頑張ったね。えらいえらい」

思えば、随分と大人びた人だった。俺と二つしか違わないはずなのに、駄々もこねないし、泣いたところを見たことも殆どなかった。さらには勉強もできたし、足も速くて、

喧嘩も強かった。人からよく頼られてたし、何より本人が困っている人を見過ごせない質で、慕う人も多かった。

あの頃の俺にとって、姉貴は何でもできるヒーローだった。

だから、

「……姉ちゃん」

「ん？なーに？」

「オレ、もう泣かない」

「……」

「オレ、強くなんだ」

姉貴みたいに、誰かを守れる人に、遊子も夏梨も、おふくろも、俺の大事な人をみんな守れるような人に

なりたいって、そう思ったんだ

「そっかー……うん……かっこいいじゃーん！……うん、強くかあ……でもさ、一護……

……あれ？

あの時姉貴はなんて言ったんだっけ

「はあっ、はあっ」

あの後、姉の姿を確認した黒崎一護は突然駆け出した。

朽木ルキアはそれを必死に追い、やっとその足を止めさせることに成功したのが今だ。

「な……なぜ逃げる！なにが…」

急な彼の行動を問い詰めるも、

「…ねぇんだよ」

彼の絞り出すような声に言葉が詰まる。

「虚でもなんでもねぇんだよ……！おふくろを殺したのは……

……俺なんだ……」

あの雨の日を思い出す
あのとき、俺は道場に通って少しずつ強くなってて、守りたい対象も増えていて、その中には当然姉貴も入ってて
だから、姉貴がいなくなったって聞いていてもたっても居られなくて
無理言っておふくろについてって
だから、
あの時、いっつも守られてたヒーローを自分が助けるんだなんて
そんなオレだったから

あの時の姉貴の眼は未だに覚えてる
あんなに冷たい瞳の色を
俺は他に見たことがない

「もーーーーーー。いい加減泣くのやめなよォ！」
泣いている双子の姉とそれを宥める妹。
黒崎夏梨は毎年この日になると泣いてしまう姉の遊子に呆れながらも、それも無理からぬことと思ってもいた。
すると遠くから間の抜けた笛の音が響く。
「！ホラ！立って遊子！ヒゲが集合のフエ吹いてるよ！行かなきゃ！」
「うん……」
姉を立たせ、父親の下へと向かおうとする。
ふと、遠くの切り立った崖に人影が見えた。髪型から女性のようで背丈は自分と大して変わらない。
「……？あの子、あんなトコで何してんだろ？」
「え？どれ？」
姉の反応を見るに、霊感のある自分にだけ見えているようだ。
（…じゃあユウレイか、あの子……）
それにしてもどこかで見たことがある気がする。

姉に少し待つように告げ、件の幽霊の元へと向かう
しかし、近づけば近づくほど既視感は大きくなり、やがてそれが誰かはっきりとわかると、歩調も速くなった。
「ね、ねえ！」
少し緊張気味に声をかける。致し方無いだろう、なにせ相手は
「お姉ちゃん！……だよね？……」
6年前の今日、亡くなった彼女の一番上の姉だったから。
姉と思われる人物はゆっくりとこちらに向き直り、徐に口を開く。
「あなた……私が見えるのね？」
「…え？あ、ああ、見えるよ！ばっちし」
「……声も、聞こえるのね……」
「お姉……ちゃん……？」
「ああ、やっとだ、やっと終われる」
「……あんた、誰？」
「それにとても
うまそうだ……!!!」

ドクン

「!!!」

それを感じたのはほぼ同時だった。

黒崎一護と朽木ルキアは虚の出現を感知し、その場へと急ぐ。

「…よう!」

「うむ!」

途中、合流を果たす。

「……何も……訊かねえのか?」

「……訊けば答えるのか?」

「……」

別れる寸前の問答が思い出され、自然とその話になるもお互いに続ける言葉を持たな

い。
故に、彼女は告げる、「待つ」と彼が自ら話したいと……話してもいいと思った時まで待つのだと。
「……いや、いい感じにしてっけど、お前、さっきは結構人の心に土足で踏み入ってたよな？」
「……い、言うな！私も反省したのだ！大体貴様がいつまでもウジウジと……」
やがて言い争いになるが、先ほどまで胸にあったわだかまりはスッキリと消えていた。
……
黒崎一護らが現場に着けば、彼の妹たちが今まさに虚に喰われそうになっている瞬間であった。
彼は即座に上の妹を捉えていた虚の舌を切断、間髪入れずに末の妹を押さえつけていた虚の腕を切り飛ばし、二人を回収すると岩陰へと避難させた。
「……」
彼は虚の姿を改めて視界に納め、尽きぬ疑問で頭を埋める。その場に彼の姉の姿があり、その振る舞いがまるで虚と結託しているように見えたためである。
「……どういうことだよ……？……姉貴…だよな？どうして……虚といっしょにいるん

だよ……!?」
「……」
「何とか言えよ！」
「……やかましい小僧よの」
「っ!?」
瞬間、姉の姿をしていたそれの皮が剥けたかと思えば、それの頭頂部から触手のようなものが伸び、虚の首に開いた穴へと繋がる。
「……な……何だよそれ……!?」
「グランドフィッシャー。」
「！」
混乱する一護にルキアが相手の正体を告げる。
疑似餌で獲物となる霊的濃度の高い人間を誘い食らう、５４年に渡って死神を斥けてきた、これまでにない大物。
そしてそれは
（つまり、あの時、俺が姉貴だと思っていたのはこいつの疑似餌で、それはつまりおふくろも、姉貴もこいつに……）
「一護っ!?」

瞬間、怒りに任せて一護は剣を振るう。
しかし、相手は５４年にもわたり死神を斥けてきた虚、彼は相手の触手のように自在に動く体毛に絡めとられてしまう。
「っ?!…自壊せよロンダニーニの黒犬！一読し、焼き払い、自ら喉を掻き切るがいい！」
ルキアは急ぎ一護を助けんと、鬼道による援護を行おうとする。
しかし、
「やめろルキアぁ!!」
ほかならぬ一護本人にそれを押しとどめられてしまう。彼はなんとか自力で体毛の拘束から脱した。
ルキアが彼に駆け寄るも、妹たちを任せると言い、彼女の援護を断った。
尚も食い下がる彼女に、一護は告げる。
「……たのむ、手ェ出さないでくれ。
これは、俺の戦いだ」

日は傾き、それと共に雲行きも怪しくなってきた。
そんな暗い林の中を二つの影が跳ねる。
一つは死神の少年黒崎一護、そしてもう一つは彼の肉親の仇である虚、グランドフィッシャーであった。
あれから一護はグランドフィッシャーと一対一での戦いに挑むも、相手のスピードに翻弄され、一太刀も与えることが出来ずにいた。
しかし、一方で
「っ！」
「ちいっ」
(こいつ……段々と動きが単調になってやがる)
グランドフィッシャーはどこか何かに急かされているかのようで、徐々にその攻撃が単調になってきていた。
それにより、一護も自分を冷静に見つめ直すことが出来、迂闊に敵の懐に入り込むことも無くなんとか立ち回ることが出来ていた。
だが、やはり両者の力量に決定的な差があり、一護はこのままでは防戦一方であるこ

とは誰の眼にも明らかであった。
「ぬうゥー・いい加減にィ……」
グランドフィッシャーが突如正面から一気に距離を詰める。
突然の行動に一護も身構える。
すると、
『お姉ちゃんを斬るの？一護……』
「っ!?」
姉の形をしたグランドフィッシャーの疑似餌が、姉の声で自身に話しかけてきたことで、一護に隙が生まれる。
その隙を老獪な虚は見逃さない。
「ひひひ、終わった！」
瞬間疑似餌ごと一護の体はグランドフィッシャーの腕に貫かれる。
「終わりだ、小僧！そして敬意を表しよう！お前は儂が出会った中で、最も若く、最も短慮で、そして
最も弱い死神だった！」
しかし、
「……やっと……捕まえたぜ……！」

黒崎一護は待っていたのだ。相手が己が懐に迂闊にも飛び込んでくるのを
「終わりだ、グランドフィッシャー。そして敬意を表しよう。テメーは俺が出会った中で、一番年喰ってて、一番汚くて、そして
一番カンに障る虚だったぜ」
自身の体を貫いた相手の腕を掴んだまま、一刀にて相手を両断した。

「はーーっはーーっ……」
とうに日は暮れ、曇天となった空からは雨が零れだす。
互いに満身創痍となった二者。
そこに駆け寄る人影が一つ。
「一護!!」
彼の誇りを見届けた一人、朽木ルキアであった。
「……よォ、遅かったじゃねーか…。もう全部…片付いた後だぞ……」

「……たわけ。……手を出すなと言ったのは……貴様ではないか」
「…そうだっけか……へへ…」
　その時、
「あああああ、嫌だ、もう嫌だ！なぜ儂が、なぜこんなぁ！」
「ッ!?」
　突然グランドフィッシャーが悲鳴を上げ始める。
　あまりに唐突な豹変ぶりに戸惑う死神二人。
　それには目もくれず、いや、むしろ二人以外の誰かに訴えるように言葉を続ける。
「小娘ぇ、いや、黒崎美柑！おのれおのれおのれおのれこの、この儂を……「黙れ」っグギャ」
　さらに突如、新たな闖入者が現れ、グランドフィッシャーの頭部を脚で打ち砕く。
「余計なことをベラベラと……戦い方も無様で見られたものじゃなかったし……これじゃやる意味ないよー……」
（……なんだ？此奴、先ほどまで霊圧を一切感じなかった……）
　ルキアは目の前の相手へと警戒を強める。
　一方で
「な……は？……え？なん……で……」

一護は混乱の極みにあった。
何故なら目の前の相手は既にグランドフィッシャーに喰われ、そして今やそのグランドフィッシャーは死に、その姿をとる者はいるはずがないのだから。
「……姉…貴……？」
おずおずと目の前の相手に問いかける。かすかな期待も込めて
「……姉貴って……昔みたいにお姉ちゃんって呼んでくれないの？一護」

だって、姉貴はグランドフィッシャーに……でも、まさか、本当に？
「本当に姉貴なのか？……」
「うるっさいなあ、もー、そうだよ、お姉ちゃんだよ、これで満足？」
思考は混乱しつつも、しかし、容姿だけでなく、しぐさや声音からこれは姉だと、彼の魂が告げている。
「あ、そうだ。おめでとうよく頑張ったね！えらいえらい！実はわた「……を立てよ〟破道の三十三、蒼火墜!!」

「っ!?ルキア?!」
　突然、朽木ルキアが攻撃を仕掛けたことで、思考の海から抜け出す。
「たわけ！何をぼさっとしている！早く構えろ！」
「な、け、けど、相手は姉貴…」
「一護！……貴様も分かっているはずだ……。目の前の相手からにじみ出る霊力、此奴は〝虚〟だ……」
「っ！」
　……ああ、ああ、分かってるよ。でも、でも…
「……いきなりなにすんのさ。家族の感動の再会を邪魔してくれちゃってさあ」
「っ！くっ、無傷か、おい、一護！」
「分かってるよ！クソッたれ！けどっ」
　だってこれは……っいや、考えるな
「うぉらアア！」
「……一護、無理しなくてもいいんだよ？血だらけじゃない……」
「うるっせえ！黙れよ！」
　考えるな考えるな考えるな
「少し休も？ほら、昔みたいに膝枕してあげよっか？」

黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ、その顔で、そのしぐさで、喋るな、微笑むな……

「一護！分かっているだろう！虚を斬るということは……」

分かってるよ！罪を洗い流すことなんだろ！でも、でも……井上の兄貴のときは、完全に虚の性に飲まれてた。くそっ、なんで目の前のこいつは……〝この人〟は

「一護……」

こんな悲しそうな顔すんだよ、こんな辛そうな顔すんだよ、こんな、こんな……

カランッ

黒崎一護の腕から斬魄刀が滑り落ちる。

「一護!!」

ルキアが後ろから声をかけるも、もう無理だ。

彼に剣を振るうだけの気力は、ない。

「……うん、今日はもう十分頑張ったよね、ゆっくりおやすみ、一護……」

そう言い残し、闖入者は姿を消す。

誇りある戦いに拭えぬ穢れを残して

「いっ…てえーーーーーーーーーー!!!」

その後、一護はルキアの手で治療されたものの、魂魄が受けた傷のすべてを治しきることはできず、肉体に戻った際、その傷のフィードバックに苦しむこととなった。

「……なあ」

「……なんだ？」

「……責めねえのかよ……」

「……」

「……俺は……斬れなかった……虚を斬ることが、殺すってことじゃないって分かっていたのに……斬ることが、姉貴の魂に安らぎを与えるんだって……分かっていたってのに……俺は…」

「……一護……」

「悪い、少しだけな」

・

・
・
「……チェッ、空気が重くて起きれやしねえ」
雨に濡れたぬいぐるみの呟きは誰に届くでもなく消えた。

「……仇は討ったよ……でも姉貴は……ゴメンな……母ちゃん……」
雨のそぼ降る中、黒崎一護は母の墓前に立ち尽くしていた。
すると、そこへ
「うおーーーい！」
「…」
「ナンだよ。いなくなったと思ったらこんなとこにいたのか……一護」
普段より幾分か落ち着いたトーンで呼びかけてきたのは、彼の父親、黒崎一心であっ

た。

……

「……早いもんだな……」

「……」

「母さんと美柑が死んでもう１０年か……」

「６年だろ」

「……惜しい！」

「惜しくねーよ！４年違うぞ！４年あったら小学生も高校生になるわ!!」

「うまいこと言うなァ、おまえ」

「感心してんじゃねーよ！」

先ほどまでの沈鬱な空気もどこへやら、完全に父親のペースに飲まれ、声を荒げる一護。

「…まァ、そうしてオマエが元気な姿見せてりゃ、母さんもそれに美柑も……向こうで安心だろうよ」

「……あ…」

そうか、親父は知らねえんだ　おふくろの魂は、姉貴の魂は、

ふと、すぐ隣でたなびく煙が目に入る。

「ん？…アンタ、煙草なんか吸ってたか？」
「…やめたんだよ、子どもが生まれた時に。……煙臭いって嫌われたくないしな」
「いや、じゃあ意志貫徹しろよ」
「バッカ……褒められたんだよ、つき合い初めの頃にな。タバコ吸ってる時の手がかっこいい、って」
「…」
「今にして思えば、後にも先にもそれだけだったな。母さんにルックスを褒められたのは」
「……」
「だから毎年この日だけ吸うことにしてんだ、あいつの前でな。ああ、あとこのスーツは美柑が仕事できそうでカッコいいって言っててな、すんげー可愛かったんだぜ、もう」
「……」
「……ンな辛気臭ぇカオすんな！元気にしてろって今言ったばっかじゃねェかよ！」
　背中を叩かれながら紡がれる言葉に、
「……なんでだよ……」
「ん？」
　6年ため込んだ感情が漏れ出す。

「なんで……笑ってられんだよ……なんで…誰も俺のこと責めないんだよ……！」
「……」
「俺は……何もできなかった…できなかったんだ……姉貴のときも、おふくろが死んだときも……今だって……！」
「……」
「どうしてだよ！誰も俺を責めないんだ！キツいんだよ！いっそムチャクチャに責めてくれりゃ楽なのに……！どうして……」
「なんでオマエを責めんのよ？」
「…あ？」
　一瞬、思考が空白になる
「真咲が死んだことでオマエを責めたりなんかしたら俺が真咲に怒られちまうわ。……大体美柑に関しちゃ親の俺が背負うもんだ、オマエにゃ千年はええ」
「……」
「……真咲が死んだのは誰のせいでもねえよ、ただ、俺の惚れた女は自分のガキを守って死ねる女だったってことさ」
「……」
「……そして忘れんなよ。オメーはその俺が惚れた女が、命がけで守った男なんだぜ」

「――――親…」

「ええい、憎いねコンチクショウ!!」

「痛ぇっ!!」

突然膝蹴りを食らい、割とガチに痛がる一護。

気づくと、父親は既に彼に背を向けてその場から去ろうとしていた。

「……しっかり生きろよ一護」

「しっかり生きて、しっかり年喰って、しっかりハゲて、そんで……俺より後に死ね」

「そんでできれば笑って死ね。でなきゃ、俺が真咲に合わせる顔がねぇ」

「ウジウジしてんなよ。悲しみなんてカッコいいモンを背負うにゃ、オメーはまだ若過ぎんのよ…。下で待ってるぞォ」

一人残された一護は、またいつかの記憶を、しかし、これまでより鮮明に思い出していた。

『……でもさ、一護』

『何？』
『お姉ちゃんは別に泣いてもいいと思うよ？』
『……え？』
『泣きたいときに泣けないなんて、辛いでしょ？。辛いのに苦しいのに笑っていられる人が強いなんて、お姉ちゃんは思わないなー』
『……そう？』
『そ、だからさ、あんたがホントに強い人になりたいなら、泣きたいときには泣いて、そんで

「〝同じように悲しめる人と一緒に歩みなさい〟か」
今思えば、随分と背伸びした言葉だ。何を、自分だって数年ぽっちしか生きてないくせに。
「ははっ……」
辛かった。苦しかった。母を殺したのは自分なんだと、だから家族は自分が守ってやらないとと、あの人の代わりにならないとと、そう、思っていた。
「さすがにこの歳になってまで泣かねっての……」
まだ分からない。確かに虚ではあったが、しかし、あれは姉そのものだった。再び出

会った時に刃を向けることが出来るのか、それは分からない。
けど、
「……聞いてるか？ルキア」
「……」
「…死神の力は戻りそうか？」
「……」
「戻りそうでも、そうでなくてもいい。もうしばらく、俺を死神のままで……もう少しだけこの力を貸してくれ」
「！」
「俺は強くなりたい。もっともっともっと。強くなって虚から守るんだ、狙われてる奴等を、救ってやるんだ、虚になった奴等を」
「……」
「また、姉貴に会って、戦えるかは……まだわかんねえ……でも、決めたんだ、姉貴の魂を救ってやるって、もう決めた」
「……」
父親の言葉を思い起こし、続ける。
「でなきゃ、おふくろに合わせるカオがねぇんだよ！」

「――――護……！」

もう雨は止んでいた。

第3話

「クソッ……」

夜も更けた町の中、石田雨竜は一人悪態をついた。

その手にある弓は一体の虚に向いている。

瞬間、弦が撓み、虚の仮面は砕け散る。

崩壊する虚を尻目に、確かめるように自身の手を何度も閉じて開く。

動きに問題はない。狙いも正確。では何故……。

「……ハァ」

彼とて理解している。

先日出くわした彼の今は亡き恩人の姿をとる虚、それを何故射ることが出来なかったのか、など。

滅却師は虚の魂を完全に消滅させてしまう。文字通り、滅却(ころ)すのだ。

雨竜自身、そのことを深刻に捉えたことはなかった。虚は人を殺し、魂を食らう化け物なのだから、滅却することも致し方ない、そう単純に考えていた。

だが、

「……僕は…こんな浅ましい人間だったのか……？」
人の姿を、それがたとえ親しかった人物の姿をした者であっても、虚であることには変わりがない、そう理解しつつも射ることが出来なかった。
これまでと同じように、仕方がないのだからと、ただ撃てばいいと、何度も自分に言い聞かせたが身体は一向に言うことを聞かなかった。
何故射てなかったのか、それを認めてしまえば、彼は……
ふと
「…今度こそ、ホンットに居るんだろうな!?今、テスト期間中なんだぞ？」
「たわけっ！黙って急がぬか！」
少し離れた場所から聞き覚えのある二つの声が聞こえた。
滅却師である自分が死神と関わりを持つことは好ましくない。
そう考え、その場を後にする。
やがて背後から、また無駄足に終わったと、悪態をつく声が響く。
（……黒崎一護……彼が死神、か）

ああ、少しだけ

妬ましい

「……どうしたの、ボク？お母さんとはぐれたの？」
滅却師に否定的である父と喧嘩して、一人泣いていた僕にそう声をかけてきた彼女は、傾きかけた陽に照らされ、輝いて見えた。
一瞬、何のことかと思考が空白になったが、すぐに自分を迷子か何かだと勘違いしていると理解し、そんなに幼く見えるのかと少しムッとした。
「…別に迷子とかじゃないです。心配されるようなことはないのでお構いなく」
「お構いなくって……あんなに泣いてて構わない方が難しいでしょ……」
そう言われて、そんなにみっともなく泣いていたのかと恥ずかしくなった。
それを誤魔化すように僕は声を荒げた。
「と、とにかく、僕は別に大丈夫ですから！」
そう言って彼女に背を向けた。
しかし

「……あの、帰らないんですか？」
「……うーん」
彼女は中々立ち去る素振りを見せなかった。
「……取り敢えず、さ……話してみない？私に。何があったのかさ」
「はあ…？」
何を言い出すのかと再び思考が空白になった。
「…話して何か解決するかは分かんないけどさ……ちょっとは楽になるでしょ？…ほら、どーんとお姉さんに話してみなさい！」
「……ハア…」
彼女はどうやらとにかく僕に何かしてあげたいという意思に満ち溢れているらしい。
もう断るのも面倒になった僕は、滅却師のことは伏せつつ、事のあらましを語った。
すると彼女は
「……なるほど…なるほど……つまり、お父さんと喧嘩しちゃって気まずくて帰れないんだね！」
「はあ!?」
そう、見当違いなことを言い出した。
「今の話を聞いてどうしてそんな……」

「え？違うの？将来の事でお父さんと喧嘩しちゃったんでしょ？」
反論しようとして、確かに滅却師の事を伏せればそんな捉え方をしてもおかしくはないと気づいた。
僕がもどかしさを感じつつ、どうにか誤解を解こうと考えていると、
「…うん、分かった、よし！じゃあ、お姉さんが君と一緒にお父さんに謝りについてってあげるよ！」
「……へ？」
「さ、行こ？……大丈夫、ちゃんと話せばお父さんも君のやりたいことを分かってくれるよ。日も暮れてきたし、早い方がいいよ、レッツゴー！」
「え？ちょっ、ちょっと！」
何度か抵抗を試みたが、結局家まで案内してしまった。
さっき勢い飛び出した家に、そう時間を置かずに戻ってきてしまい、気まずかったが、
「ごめんくださーい、黒崎という者ですけどもー！」
横にいる彼女によりそんな気持ちも吹き飛んでいた。癪ではあるが……ほんの少し、勇気づけられていた。
家政婦さんは驚いていたが、父も驚いた顔を見せていたのが意外だった。
その後暫く父と彼女の二人だけで何やら応接間で話していたようだから、二人は顔見

知りだったのだろう。
やがて父が彼女と共に部屋から出てきた。
どう話そうかと悩んでいたが、意外にも父の方から切り出してきた。
父は師匠（せんせい）の下へと通うこと自体は否定しないが、僕には才能がなく、またゆくゆくは医者として生計を立てるようになって欲しいため、ほどほどにしておいて欲しいと、いつになくはっきりと伝えてきた。
否定しないというのが、父にとっての最大限の譲歩だったのだろう。
父の方から歩み寄ってきたこともあって、この日はひとまずの和解をみた。
……結局その後も何度か衝突し、今現在は実家を出て一人暮らしをしているが、あの時は確かに父と真正面から向き合えた。

今、父の言葉を身に染みて感じている。

父には生きている人間と死んでいる人間をハッキリ分けて捉えられる割り切りの良さがあった。
時には冷徹な決断も下せる芯の強さがあった。
そのどちらも僕には欠けていた。

戦闘力よりも何よりも
それが滅却師に欠かせない才能だった。

その後、彼女とはよく会うようになった。
会っても何でもないことを語り合うだけだったが、虚に襲われる人々を見て無力に震える日々を送っていた僕にとっては、安らぎをもたらしてくれるかけがえのない時間だった。
何度も会ううちに彼女が霊力を持つことが分かってからは、より一層親交も深まった。

そんな風に、仲間が増えたと愚かにも喜んでいただけだったから、霊力があるのに自衛手段を持っていないということを、深刻に捉えていなかったから。

僕はいつまでも無力だ。

彼女が殺されたときも、
師匠が殺されたときも、

そして、今も

だが、それだけならばまだ耐えられた。

死神への憎しみは確かにある、しかしどちらかといえば失望の方が強い。
死神に期待していたから、少なからず心のどこかで頼ってしまっていたから。
だからひたすら努力した。
二度と死神にすがることのない様に、二度と大切なものを失わないように

なのに

「結っ局！また虚はいなかったじゃねえかよ!!」
夜の町に黒崎一護の悪態が響く。
ここ数日の間、朽木ルキアの伝令神機に不具合があるのか、虚の出現を確認し、その

場に向かうも虚の姿が見当たらないということが続いていた。
一護はルキアへと不満をぶつける。
「いいかげんホントどうにかしろよ！」
「私のせいだというのか!?私は伝令神機に入る指令のままを貴様に伝えておるのだ！」
「だから、そいつを早く直せっての!!」
と、そこへ
「仲間割れかい？みっともないな」
「!?」
「こんばんは、黒崎くん、朽木さん」
上から下まで白で統一された服に身を包んだ人物が姿を現した。
その人物は突然の出現に驚く彼らを他所に、その場でいち早く虚の出現を察知し、それどころか弓状の謎の武器を用い、その虚を仕留めてみせた。
「なんなんだ……お前…」

あのときの父の様子が気にかかり、黒崎さんのことを知っているのかとしつこく聞い

た。
そこで父から彼女の母親は石田家に連なる人間であり、滅却師であること、即ち彼女も滅却師の血を引いているのだと知らされた。
黒崎一護、彼女の弟。
彼のことは何度か彼女から聞いていた。
オレンジの髪をした少し意地っ張りだけど優しい弟。
高校に上がって、オレンジの髪に黒崎の姓、さらには霊力も有している、そんな彼と出会い、すぐに彼女の弟だと分かった。印象こそ聞いていたものと違ったがそこは成長と共に変わりもするだろうと納得した。
黒崎さんとの会話から、彼女が滅却師の事を知らされずに育っていたと分かったため、彼もそうなのだろうと思ってはいたが、しかしシンパシーを覚えずにはいられなかった。
滅却師の血を引く者同士。
共通の知人を持つ者同士。
死神が滅却師と協力していれば救えたかもしれない命を知る者同士。
自身の無力に……苦しんだであろう者同士。

そんな君が

何故、僕と同じはずの君が
大切な人を救わなかった者たちと同じ力を持っている？

「……石田雨竜、滅却師」

何故、僕ではなく君が
彼女の魂を救える力を持っている？

「……僕は死神君を憎む」

ああ、本当に

妬ましい憎らしい

「……家までついて来る気かい？黒崎一護」
「ちぇっ、バレてたのか……いつから気づいてた？」
「井上さんと教室のドアの所から僕を盗み見てた時から」
　石田雨竜が黒崎一護と邂逅を果たした翌日の放課後、昨晩の雨竜の言葉の真意を測りかね、一護は彼の後をつけていた。
「…勝手について来るのは血筋か？」
「あ？何だよ？」
「いや、別に……君はどうも、霊力の高い人間を察知する能力は欠けているみたいだね。その証拠に、今日まで僕の存在に気付かなかった」
　雨竜は一護へと告げる。自身は気づいていたと、彼が五月の半ばに死神の力を得たことも朽木ルキアの正体が死神であることも、そして
「勝負しないか、黒崎一護。死神と滅却師(君)(僕)とどちらが優れているか、分からせてあげるよ……死神なんてこの世に必要ないってことをさ」
　そう、切り出した。

（今のヤツでさっき夏梨を見かけた場所から家までの間の虚はあらかた倒した…これでひとまず夏梨は安全だ）

黒崎一護は無数に湧き続ける虚を狩るため町を駆けていた。

石田雨竜が提案してきた勝負の内容とは撒き餌を使って町に呼び寄せた虚をどちらが多く狩れるかを競うというものだった。

当然承諾できるものではなかったが、止める間もなく雨竜によって撒き餌が放たれてしまった。

虚は霊力の高い人間を優先的に襲う。

よって一護は彼の妹で霊を視認できるほどの霊力を持つ黒崎夏梨の安全を確保するために動くことを余儀なくされたが、それが済んだとあれば

「あとは石田！テメーを泣かしてこの状況を収拾させる！」

（クソッ……数が異常に多い……）

石田雨竜は撒き餌に誘われてきた虚の数が想定をはるかに超えていたため、酷く焦っていた。

彼がこの勝負を申し出た理由、祖父を失った原因の一端である死神を見つけたこと、それもあったが、その件に関しては死神自体に対する憎しみよりも自身の力量不足を嘆く気持ちが方が強く、寧ろ黒崎一護という個人に対する憎しみ、それが大きかった。

（……いや、僕はまだやれる！…彼よりも僕の方が上なのだから……そうでなくては……）

と、その思考は

「ようやく見つけたぜ……石田ァ！」

彼の前に現れた黒崎一護のがなり声によって打ち切られた。

滅却師は虚の魂を滅却する。
しかしそれは現世と尸魂界のバランスを崩壊に導く。
よって滅却師は死神に滅ぼされた。
「ルキアから聞いたぜ…お前が死神を憎む理由。けどなあ、石田！お前の」
黒崎一護は朽木ルキアより滅却師滅亡の顛末を聞かされ、石田雨竜が何故死神にこだわっているのかを理解したものの、そのやり方に関しては腹に据えかねていたため、文句を続けようとしたが
「勘違いしているようだけど」
「あ？」
他ならぬ雨竜によって遮られた。
「僕は別に何百年も前の昔話に拘っているわけじゃない。その滅亡話にしたって、死神側が正しいと感じていたくらいさ。死神への憎しみは確かだけど、それはまた別の理由だよ。
そして、僕が君に勝負を挑んだのも、死神への憎しみが理由じゃない。
君が気に食わないからだよ。
黒崎一護」
「ハア？」

「滅却師に必要なものは何だと思う？」
「…知らねえよ」
「……虚と戦い、人々を守るということは彼らの命を、その責任を残らず背負うということを意味する。
　時には誰かを救えず、己の無力に嘆くこともあるかもしれない、それどころか誰かを救わない選択を強いられることすらあるかもしれない。
　分かるかい？……滅却師…ひいては死神であるということは、虚との戦いにおける犠牲を許容する必要に駆られる、その覚悟こそ、滅却師に、そして勿論死神にも必要なものなんだよ。
　死神の力を借りただけの君に、そんな覚悟があるのかい？」
「……」
「大した覚悟もなくただ惰性でその力を振るっているのなら……正直目障りだ。どうぞそこで見ていてくれ。
　僕が虚を残らず殲滅し、君との勝負に勝つところをね」
　そう言い放つと雨竜は一護へと背を向け、一人虚の大群へと向かう。
　対して一護は
「…っせえな」

「……？何を…」
「しゃらくせえェェ!!!」
助走をつけて雨竜の頭部に勢いよく蹴りを食らわせた。
「な……なな何をする!!」
「うるせえ！……大体覚悟がどうとか言ってる場合かよ!!この数相手にてめー一人で勝てるわけねえだろ！」
「……共同戦線を張れとでも？生憎僕は…」
「あー、めんどくせえな！……そりゃ、俺はただ人を救いたいってだけで、ご立派な覚悟なんざ持ち合わせちゃいねえよ。
けどな、少なくとも大勢の人間巻き込んでこんな事やらかしたオメーよりはマシなつもりだぜ？」
「……」
「大体、これははじめっから俺とお前の勝負だ。共同戦線なんざ言うつもりはねえ…だからって黙って見てるわけがねえだろ。
虚も全部ブッ倒して、ついでに生き残ってお前もブン殴る。……オメーはどうなんだ？」
「……フッ」

答えは一護の後ろに迫っていた虚が矢に射貫かれたことからも明らかだった。
「…てめーは絶対後で泣かすからな！」
「どうぞ？君が生き残れたらね！」

「石田。いっしょに昼メシ食おうぜ」
あの後、大虚の出現や浦原喜助の助力、一護の霊力の暴走など様々なことが起こり、その過程で雨竜は腕を酷く負傷したものの、概ね丸く収まった。
その次の日の昼休み、一護は雨竜を昼食に誘った。
一度断られたが、浅野啓吾の奢り（本人の了承無し）という条件を出すと快諾された。
しかしながら、特に話題もないため、会話が弾むはずもなく、それどころか
「……何故僕を誘った？この怪我に対する義理か？だったらそれはお門違いだし、こういう気の遣われ方は正直、迷惑だ」
「うるせえな…気分だよ、気分。俺だって好き好んでオメーなんか誘ってねーんだ。誘われただけありがたいと思え。感謝しろ」

一護と雨竜はグチグチと互いが互いに対し悪態をつき始めた。

しかしながら、決して悪いものでもないとも互いに思っていた。

雨竜は目の前の目つきの悪い男に関して思う。

自分に似ていると思っていたが、気のせいだったらしい。

こんな粗暴で頭の悪い男と自分を重ねていただなんて、悪い冗談だ。

「…『少し意地っ張りだけど優しい子』、か」

雨竜は少し口元を緩めつつ、誰に言うともなく呟いた。

「身内びいきが過ぎますよ、黒崎さん」

第４話

愛しい家族があった。
多くの友も持った。
いつしか将来の夢すら抱いていた。
そして、それらを失った。
しかし、その全てが自分の妄想に沿うよう誂えられたものだったなら
こんなに馬鹿馬鹿しいことはない。

「暑ィ…」

7月17日、浅野啓吾は姉のみづ穂に付き合わされ、炎天下の中、長い坂道を歩いていた。

「…ウルッサイ!!あんたが暑い暑い言うたびに体感温度が2度上がってんのよ!!黙って歩け!」

前を歩くみづ穂から怒鳴られ、押し黙る。

今年の6月17日、即ちみづ穂の友人である黒崎美柑の命日は平日であったため、墓参りに行くことは適わなかったこともあり、月命日でかつ休日の今日訪れることにしたのだ。

みづ穂は今年受験生で、入試の結果次第では実家に気軽に帰省することも難しくなるため、一度地元を離れる前に訪れておきたかったという事情もある。

ふと、みづ穂が前を歩く人物に気づく。

「あれ?先客かな」

姉の言葉を受けて、啓吾もそちらに目を向ける。

「ん?んんー……何か…見覚えがあるような…」

メガネをかけた白髪の男性で見るからに上等そうな白のスーツに身を包んでいた。どこか既視感を覚えるも、断定はできず啓吾は首をひねった。

虚夜宮（ラスノーチェス）、現虚圏の実質的支配者である藍染惣右介の居城にて
「済まないね、もう少し早く君を同胞に紹介しておきたかったんだが……」
「いえ、私も少しやることがあったので寧ろ丁度良かったです」
その廊下を和やかに語り合いながら歩く二組の影。
一人は城主たる藍染惣右介。
一人は新参者である黒崎美柑。
やがて二者は一つの部屋の前へとたどり着く。
荘厳な扉の前で藍染が美柑へと語り掛ける。
「……さ、この先だ。……ところで、君は何番を望む？」
「ああ…５番を」
「…そうか、君が勝ち取れることを祈っているよ」
扉が開かれた先には
１０体の破面。

「待たせて済まない、十刃諸君。今回集まってもらったのは他でもない……新たな同胞を紹介したくてね」

「へー、真咲さんのご友人の方でしたか」

浅野姉弟が墓地へと向かう中、前を歩いていた人物と全く同じ方向に向かっていたため、まさかとは思ったが案の定、同じ墓に用があった。

何も声を掛けないのも何なので、みづ穂が話しかけると、黒崎美柑の母である黒崎真咲の友人であった。

「ええ、毎年この時期に来るようにしているんです……お二人は?」

「ああ……えっと、私は美柑ちゃんの友人で…こっちは付き添いの弟です。私が高3で今年受験なんで、来れるうちに来ておきたくて…」

「そうですか…受験、頑張ってください」

「ええ、ありがとうございます」

みづ穂が彼と話す中、啓吾は未だに既視感の正体を掴みかねていた。

（何だ？……やっぱり、どっかで…白スーツか？いや、違うなあ……）

虚圏の一角、虚夜宮から少し離れた場所で二体の破面が相対していた。
一人は黒崎美柑。
そしてもう一人は
「……チッ、ナメやがって…」
第５十刃（クイントエスパーダ）、ノイトラ・ジルガである。
藍染から招集を受けた彼、紹介された新参者は見るからに弱そうな子供の破面だった。
それだけならば、単にどうでもいいというだけで終わっていたが、
「ノイトラ、彼女と数字をかけて戦ってくれないかい？」
「は？」
藍染から名指しで新参者と殺し合えとの命を受けた。
（虚夜宮の外でとの指定があった…ってことはコイツは最上級虚か？……イヤ、コイ

ツからはそれ程の霊圧は感じられねェ…王虚の閃光（グラン・レイ・セロ）の使用を想定してってトコか）
「…こんなガキ相手に本気を出せってのか？」
「おーーーい」
ノイトラの苛立つ思考は目の前から響いた間の抜けた声に打ち切られた。
「ああ？」
「もう、始めていい？」
緊張感の欠片もないその声に、ノイトラは益々怒りを募らせる。
「……勝てると思ってんのか、ガキ」
「え？勿論だけど？……何か変なこと言った？」
結局戦端を開いたのはノイトラだった。
「殺す!!!」

久しぶりだね、美柑。
私はもう高3になってしまったよ。

受験勉強ってのは……辛いね。
そして未だに理想のボウズには出会えていないよ。
……まあ、大学行ったら出会いもあるか。
あんたも生きてたら、今頃受験勉強にひいこら言ってたんだろうね。
そういえば、私生徒会長なんだけど、あんたが生きていたら副会長ぐらいになってたかな。
……あんたが生きていたなら……あれ？
何故かあんたがグレて不良になる未来が浮かんできたぞ……。
あんたって天才肌であんまり努力とかしないタイプだったから……どっかでドロップアウトしそうだなあ…。
まあ、こっちは元気でやってるからさ、心配しないで……

「…長ぇ」
啓吾にとって黒崎美柑は憧れの人物でこそあったが、姉ほど親しくもなかったため、何となく居心地が悪かった。
姉が長い間手を合わせて目を閉じたままで動かないのを尻目に啓吾は改めて件の人物を見ていた。

（白髪？いや、違う……）

「……何か？」

あまりにまじまじと見つめていたために不審がられてしまったらしい。

「い、いえ、すみません」

慌てて目を逸らす。

しかし、既視感の正体にあと一歩でたどり着ける気もしていた。そして

（白髪じゃないな……うーんメガネ？メガネ……ん？……んんん!!?）

「あああああ!!!」

やっと正体に思い至り、思わず声を上げてしまった。そのままの勢いで件の人物に問いかける

が

「あの、もしかして息子さ…「うるっせえ!!!墓地では静かにしやがれェ!!!!」ゴフッ」

姉の膝蹴りを受けて、最後まで言うことは適わなかった。

戦いは一方的なものだった。
「ハアッ……ハアッ……クソッなんだありゃ！」
ノイトラの劣勢という形で。
荒い呼吸を繰り返すノイトラの背後の空間に黒い穴が開く。
「！くっ」
すぐさま回避行動をとる。一拍遅れ、その穴から霊力によって編まれた閃光が放たれ、先ほどまでノイトラが居た場所を消し飛ばす。
「ハアッ…ハアッ…」
間一髪避け切ったノイトラの背後から間延びした声が響く。
「凄ーい！今の完全に隙をついたつもりだったんだけど」
「……クソが」
ノイトラが先ほどの攻撃を放った相手、美柑を睨みつけるも、彼女は全く意に介さず、自分の能力に関して自慢げに語りだす。
「ふふーん、不思議かな？この能力。でも、実は割と単純なんだよねー。黒腔（ガルガンタ）の応用でさ、私のは現世と虚圏じゃなくて現世と現世、虚圏と虚圏を繋ぐわけよ。だからこーやって……」
言葉と共に美柑の手元に黒腔が開く。それと同時にノイトラの頭上にも黒腔が展開

される。
　美柑の手元に霊力が集中し、やがて閃光を成す。
「虚閃（セロ）」
　黒腔を通し、ノイトラの頭上から閃光が放たれるも、再び間一髪回避する。
「フフッ、名付けて暁腔（ガルガンタ・デ・オロ）!!カッコいいでしょ！」
「…ナメやがって」
　連続して展開される黒腔から放たれる虚閃を避けつつ、ノイトラは考える。
（確かに能力自体は厄介だな……が、奴の霊圧からみても…）
「同時に複数展開することは出来ねえみてえだなあ！」
　ノイトラは避けた同時に一気に相手へと距離を詰める。
（避けた瞬間が隙だ）
「うわっ！」
「終わりだァ！」
　ノイトラの刃が美柑を捉える
　が、
「なんちゃって」
「!?」

ノイトラの背後に黒腔が展開される。
しかも、先程の黒腔は開いたまま。
「ぐっ！」
完全に隙をつかれ、なすすべなくノイトラは土煙をたてながら地面を転がる。
「あれ？…流石硬いなぁ、一撃じゃ無理かー」
美柑は明るい調子を崩さず独り言ちる。
ふと、土煙の中から声が響く。
「……けんな」
「…ん？」
「ふざけんじゃねえぞ、クソガキがァ!!!?」
言葉と共にノイトラが自身の長大な斬魄刀を掲げる。
そして
「祈(いの)れ　『聖哭蟷螂(サンタテレサ)』!!」
解号を唱えた。

「はー、やっぱり石田のお父さんでしたか」
啓吾の既視感の正体は彼の同級生の石田雨竜に端を発するものであった。件の人物に訊いてみると案の定、彼は雨竜の父親であった。
しかしながら
「…ちょっと意外でした」
「何がですか?」
「いや、アイツ、金欠っぽかったんで……」
昼食を驕ると聞いて食いついてきた彼の様子から、啓吾はもっと庶民的な親を想像していた。
「ああ……あの子は、今は実家から出て一人暮らしをしていますから」
「へ、へえ…」
あまり深く掘り下げるべきではないとその話題を打ち切る。
その後、何でも無いような会話を少ししてから石田父の方がこの後用事があるとのことで、その場を後にしていった。
「……世の中ってのは狭いなあ」

近頃しみじみとそう思う啓吾であった。

「あー、参ったな」
美柑は少し困ったような声で呟いた。
黒腔、彼女の言うところの暁腔から虚閃を放つも帰刃（レスレクシオン）により力を増したノイトラには通用しない。
複数の腕を駆使し、様々な角度から飛び交う虚閃を弾いている。
先程の不意打ちによる虚閃で稼いだ距離も確実に詰められていた。
「どうしたものか……。！」
「また届いたなぁ、ガキ!!」
遂にノイトラの刃は再び美柑の喉元に迫っていた。
しかし、
「は？」
瞬間彼女の頭部が扁平に形を変え、ノイトラの刃から逃れた。

そして直後

「虚閃」

変形した頭部から閃光が放たれた。

突然のことにあっけにとられるも、即座に斬魄刀で虚閃を撃ち消さんと構えるが、

（……なんなんだコイツは…だが、コイツ程度の虚閃で帰刃後の俺…「ガハッ!!!?」

再びノイトラの身体は吹き飛ばされ、地面を転がる。

しかも、今回は前回とは比にならないほどの勢いで。

「あちゃあー、手元が狂っちゃったな。手加減失敗」

美柑は変わらず呑気な調子を見せる。

「ゴフッ……な、何が……」

ノイトラが自身の身体を確認する。

と、

「な、何だこりゃあァ……!!?」

彼の右腕は根元から消失し、また右脚に至っては腰部ごと吹き飛んでいた。

「がっ…ぐあああああ!!!」

「ごめんねー…あ、そうだ、さっき形が変わったのはね、絞咽転調（カストラート）って能力で……」

得意げに能力に関して語りだした美柑にノイトラが問いかける。
「お前、ぐっ…何なんだ……明らかにお前の霊圧と出力に差がありすぎる!!どんなからくりだ、テメエ!」
それに対し、美柑は何かを思い出したように手を叩き、笑顔を浮かべながら言った。
「ああ、ごめんごめん、対等な戦いを演出してあげようと思ってさ、ちょっと霊圧を誤魔化してたんだ」
「誤魔……化す?…演出、だと?」
「そ、さっき説明した絞咽転調の応用でさ、見かけ上の霊圧も好きにコントロールできるんだ。
じゃ、解除するね」
瞬間、戦場に死が充満する。
霊力の量もさることながら、その質が明らかに違った。
酷く重く、濃い、死そのものを表すかのような霊圧。
知らず、ノイトラは震えていた。
「あー、でももう、それだけボロボロだと、手加減する意味もないか……よしっ、ちゃっちゃと終わらせちゃおう!」
「……ふざけるなよ……ふざけてんじゃねえぞ!!ガキ!!」

気炎を吐き、最後の力を振り絞り、ノイトラは駆ける。
そんな彼に対し、美柑は初めて斬魄刀を構えた。
「厭(いと)え　『噤昧緞帳(オスクリダード)』」
瞬間、ノイトラの視界が黒く染まった。

こんなガキに
ノイトラはそう思わずにはいられなかった。
しかし、その酷く冷たい瞳を見て、納得した。
ああ、コイツは俺と同じだ。
コイツは世界のすべてに絶望している。
虚の救いようのなさを知っている。
自然と口角が上がる。

良かった。
虚というものの救いのなさを確信して、
死はやはり救いだと思い知って、
そして目の前の相手を
嘲って死ねるのだから。
精々生き足掻け。
その虚ろな魂に救いがあらんことを。
蟷螂は、祈った。

「次来れるのはいつになるかなあ」
日が傾き始めた道を姉弟は歩く。
帰りは行きと打って変わり、多少涼しかった。
「あんた、今年も友達とどっか行くの？」
「…それがさあ、全員用事があるとかで断られちまったよ」

「……ふーーん…勉強でもしたら？受験なんてあっという間よ？」
「…ブルーな気分に追い打ちをかけてくんなよ」
ふと、啓吾はこんな会話を、ここに初恋の人も加えた三人でよくしていたと思い出した。

いつも姉が自分を脅しつけるようなことを言って、そうしたらあの人が姉を窘めて……。
ああ、だから好きだったのか。
特別でもなんでもない思い出だ。
しかし少し寂しい気持ちになった。

藍染が徐に口を開く。
「おめでとう、黒崎美柑。今より君が第５十刃だ」

祝福の言葉を受けるも、少女は
「……あの、申し訳ないのですが……その名ではあまり呼んで欲しくなくて……」
と、少し言い淀みながら伝えた。
「そうかい……では、どう呼ぶべきかな？」
すると少女は恥ずかしそうにしながら
「あの……ソロミア……
ソロミア・テリンガーテル…と、お呼び…ください……」
そう、申し出た。

「名前はソロミア・テリンガーテル！でな、能力には暁腔と絞咽転調ってのがあってだな！どっちもＴｏＬＯＶＥるの金色の闇を意識している能力なんだが……」
あの時、自慢気に語っていた能力設定。
その全てが完全に揃っていた。
なら、演じよう。
妄想の通りに、望んだ通りに。

だから、何でもないんだ。
初めからこう望んでいたのだから。
だから、何でもないんだ。
未来が閉ざされたことも、母を手にかけたことも、友を食らったことも。
だから、何でもないんだ。
私は初めから、ソロミア・テリンガーテルであったのだから。